



洲崎パラダイス

芝木好子



講談社

洲崎パラダイス



昭和30年12月20日 第1刷発行 辛 250

著 者 ^{しば き よし こ}
芝 木 好 子

東京都文京区音羽町 3-19
発 行 者 野 間 省 一

東京都文京区音羽町 3-19
印 刷 所 豊国印刷株式会社
代表者 渋谷 龍 吉

発行所 東京都文京区 音羽町 3-19 株式 会社 大日本雄弁会講談社

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。 (黒罫製本)

目次

洲崎パラダイス	三
黒い炎	六二
洲崎界限	九
歓楽の町	二七
蝶になるまで	一五
洲崎の女	一八六
あとがき	二二三

装
幀
高
橋
忠
彌

洲崎 パラダイス

宿屋の払ひを済ませて外に出ると、二人の懷中には百圓の金も残らなかつた。義治が煙草を買つてゐるひまに、葛枝はあてもなく橋桁まで歩いていつた。夕ぐれの色は茜色から淡紫に昏れかけて絵のやうにしづまつてゐるが、潮どきなのか河だけは一ぐんぐん水嵩を増して、たふたぶ音立ててゐる。隅田川のひろい河幅がふくれて、上流へ上流へと押してゆくやうな激しい水の勢ひだつた。葛枝は橋の欄干に沿つて覗きながら、義治がこの河勢をみてなんと云ふかと思つた。二言目には「死ぬ」と云ひ、「死にやあいい」と自棄になつてゐる彼なので、葛枝は深い水の底をみると厭な氣がした。渦巻きながら溢れてゆく水の色は、少しも澄んでゐない。

義治がズツクのポストンバッグをさげて、のつそりと寄つてきた。これから何処へゆくといふあてもない。河岸に白つばい灯がきらめきだした。義治が煙草に火をつけて吸ふ間、葛枝は欄干を背にして今夜の落着き場所をめぐらしたが、金のない人間のあてどなきに、腹が立つてくるの

だ。橋をゆきかふ人の足音も絶えたやうな、物音の消えた一ときをさうしてゐると、世間から取残されたやうで、葛枝はつと身を起して歩きだした。死ぬときも死場所を探さなければならぬ人間は、なんと厄介なのだらうと思ふ。

橋を渡ると大通りで、電車が轟々と走つてゐる。急に下界へ下りたやうなざわめきだつた。吾妻橋の方から大きな車体のバスがやつてくると、葛枝は誘はれてその方へ歩いていった。彼女が人のあとから乗りこむと、バスは走り出した。ポストンバッグを提げた義治がステップに掴まつてゐる。バスは電車通りをそれて、本所界隈から深川へぬけて走つた。あたりが暮れてきて、夕餉の匂ひの立ちさうな街並だつた。このバスは終着が月島だが、義治は一月前までこの倉庫会社に働いてゐた。その頃は身綺麗で、おしやれな若者だつたが、今は疲れて垢じみた風体に変り果ててゐる。職を離れた人間が例外なしに陥る陰鬱な翳を、彼もおびてゐるのだつた。

バスが木場の材木問屋の並ぶ街へ出ると、そのあたりから街を縦横に走る運河があり、材木が橋の下を埋めて流木になつてゐるのを、葛枝はめづらしい眼で眺めた。彼女は洲崎までくると義治をうながしてバスを降りた。

「終点までゆけばいいのに」

「月島まで行つて、倉庫の中にも寝る気？」

蔦枝はまつびらだと思つた。

人通りの少い裏町へ入ると、両手で着物の裾をつまんだ横着な恰好で、彼女はとみかうみしながら、義治にかまはずに先へ歩いた。釣舟の網元の看板がみえて、運河に沿つたあたりはバラックの飲み屋が多い。嘗つて洲崎遊廓と呼ばれた一郭はぐるりが掘割で囲まれた島になつてゐる。コンクリートの堤防の下は水の流れたつた。正面の橋のたもとまできた蔦枝は、その附近に並んでゐる小さな酒の店の一つののれんを分けて入つた。狭い一坪半ほどの店で、鉤の手に台があつて、丸い椅子が並んでゐるきりだつた。壁に清酒とかビールとか、湯豆腐とか書いたびらが下つてゐる。蔦枝も義治も疲れたやうに、その椅子へ腰を下した。裏から七輪を抱へた女が入つてきた。紺の縮みの上に白い割烹着をつけて、端折つた裾から赤い蹴出しを出してゐるが、さつぱりした顔立の三十五六の女だつた。まだ店あけなのだらう。

「ビールを貰はうかしら」

蔦枝は一文もない懷中をせうら笑ふつもりで、義治の方は少しも見なかつた。裾を下したおか

みさんはすぐコップを二つ並べて、ビールを持つてきた。白粉気のない、愛嬌の乏しい貌だが、むづかしい穿鑿するやうな眼はしてゐない。どことなくさばさばした單純な感じの女だつた。ビールをとくとくと酌いで、すぐ奥に引込むと、子供になにか口早に吩咐けてゐる。

葛枝は一杯のビールをぐうつと泡ごと飲み干した。美味い、なにもかも忘れるやうな爽やかさだつた。彼女はおかみさんが代りのビールを持つて入つてくると、ふつと訊ねた。

「このへんに、あたしたちを住込ませてくれる店はないでせうか」

おかみさんはへえと二人を見比べながら、初めて硝子戸の女中さん入用の張紙で来た女かと、氣付いたのだつた。

「さあ、ふたり一緒にやあね」

「別なら、あるんですか」

「うちでも要ることは要るけど」

葛枝はおかみさんをちつと仰いだ。

「あたしたち、いろいろわけがありましてね」

彼女が語り出したのはかうだつた。二人は栃木県の在の者だが、彼女が事情あつて町へ出て料

理屋の女中をしたので、男の親元が二人の結婚を許さうとしなかった。そこで二人は郷里を出奔して、東京へきたものの、男には思はしい就職口もなく転々としてゐるうちに、有金を使ひ果してしまつたのだつた。

今夜の寢床もないと聞いて、おかみさんは卓に肘をついた。三日か五日に一人位は張紙を見て入つてくる女もゐたが、長続きたためしがない。大半は特飲街へ入りたい氣持の女が、足場のつもりで腰をかけるのだし、さうではなく、本氣で女中をする氣の山だし女も、四五日するともう氣の変るのが例である。どうせ同じやうな客相手なら、パンパンになつても化粧や美しい着物に飾り、華やかな嬌聲の生活に變りたいと思ふのが、彼女らのお定まりだつた。かへつて亭主持ならば、その点で案外腰が坐るかもしれない。おかみさんは女を注意してみても、まだ年齢も若さうだし、浚皮のむけた、細おもての色白の器量も氣に入つたので、置いてみようかと心が動いた。それにしてもひものついてゐるのは厄介だつた。見たところ悪賢い男ではなささうだが、一体これまでなにを職業にできたのかと、男に向けて訊ねると、すぐ葛枝が引取つて、

「倉庫会社の帳付なんです。木場にそんな仕事はないものでせうか」

男の仕事がさう右から左にあるわけはないし、木場は不景氣で到底見込みがない、とおかみさ

んはそつけなく云つた。

「あつたところで、荷揚げ人夫くらゐがおちですよ」

それでもかまはないから、よろしく頼むと女が云ふと、それまで押し黙つてゐた男は、打ちのめされたやうに、意気地なく、頭を下げた。皮膚の厚手な、遅しい男で、立派な胸板をもつてゐたが、それでゐてどことなく小心で怒りつぽさうな、小さな三角眼をしてゐた。

のれんを分けて、新しい客が入つてきた。三人は一斉に立上つて、椅子を揃へた。蔦枝は気軽に内側へまはつて、もう客のために笑顔を用意してゐる。義治がボストンバッグをさげて台所へまはると、横手に六畳ほどの部屋があつたがバラック建で粗末な建てつけだつた。男の子が二人寝転んでメニコを数へてゐるので、義治は上り框にかけて、その手許をぼんやり覗きこんだ。メニコも、このバラックもまだ信じられない。この六畳が今夜のねぐらと決つたところで、明日はどうなるものか、彼には解らないのだ。子供たちは義治の顔を見ようとしめない。彼は煙草をさぐつて、火を点けて吸つた。

「坊やのお父さんはゐないのかい」

子供はちよつと身じろいで、うんと云つた。

「死んだのか」

「知らない。どこかへ行つたんだろ」

大きな方の男の子は、面倒さうに答へて、またメンコを揃へるのに余念がない。義治は子供にまで突き放された気持で、立つて台所の窓から外をみてみた。ほんの一跨ぎの窓下の土から先はコンクリートの崖で、その下に細い運河が流れてゐる。その水垣で区切つた洲崎特飲街は、左手にネオンがあかく瞬いてゐた。自動車が警笛を鳴して橋を渡り、ネオンの街へ消えてゆくのを、彼はちつと見送つた。灯の瞬く歓楽の町が、云ひしれぬなつかしさで、彼の胸に沁みた。この巷に足を踏みこむときの、そぞろなときめきが甦ると、苦痛に似た鋭いものが彼の胸を走つた。店先からは客を相手にしたおかみさんと、馴々しく笑つてゐる蔦枝の聲が、弾んだ調子で響いてくる。何処であらうとすぐに坐り場所をみつける女の厚かましさに、義治は吐き出したい嫌悪を感じて、煙草の吸殻を力まかせに掘割の水へ投げ捨てた。ついでに自分もその堤防へ投げつけた。焦立たしだつた。義治は転々として今日まであてもなく蔦枝と宿をかへて歩きながら、最後のところで、女の気持のあやふやが不安でならなかつた。金のなくなつた日が終りの日だと腹を据ゑてゐながら、ずるずるとこゝまで来てしまつたことで、彼は蔦枝に負けた気持を蔽へない。な

んともみじめな死にそこなひのあがきさへ覚える。しよせん死にたいと口に云ふうちは死ねないのだと、自嘲が湧いた。倉庫会社に勤めて、どうやら定つた給料にありついてゐた頃には想像も出来ない、失職後の彷徨に疲れると、生活の支への給料といふものが彼にはつくづく不思議な魔力におもへてくる。女のために何もかもふいにしたあげく、一文なしのルンペンになつて、死にもしなければ生きも出来ない自分の無力につきあたると、義治はやりきれなさで、今夜と云はず目の前のネオンの街へ走つて、いい気な葛枝に思ひしらせたい卑しい感情に駆り立てられる。それでゐて囊中に一銭の金もありはしないのだ。彼には尾久に少しばかり面倒をみてくれた伯父がゐるぎりだつた。

店先からは陽気な客が、葛枝をからかつてゐる声がしてゐた。彼女が身を揉んで、相手の肩に手をかけてはしやいでゐるさまが、見えるやうだつた。

「堅気ですよ、これでもあたし堅気なのよ、ねえおかみさん」

葛枝の舌足らずの甘えた媚態を、義治はゆるせなかつた。堅気もないものだと思ふ。男とみればすぐに声をかけ、接触によつてからめとらうとする習性をみると、女の性根が今だにこれだつたかと、憎しみが強まつてくる。客はすっかり上機嫌で、いつまでも飲んでゐる。義治は呪ひな

がらも、客の帰るのを待たなければならない。

子供たちが先に寝てしまひ、十二時を合図に特飲街の灯が消えると、店終ひだつた。その夜は六畳の座敷の河に面した半分が、義治と蔦枝の寝室になつた。こんなこともまゝあるのか、六畳の真中に黒幕のカーテンが引けるやうになつてゐる。おかみさんは子供の中に入ると、すぐさま寢息を立てはじめた。義治は恥も外聞もなかつた。俺は別々になるのは厭だ、明日はこゝを出よう、と云つた。蔦枝はふてたやうに黙つてゐる。彼はかつとして、太い腕をからめて、力を入れた。彼の腕は女の細い頸を絞めるくらゐは造作もなかつた。しかしもう一息の把握力がないために、彼は一生悩むしかないのだ。たとへかうして蔦枝の同意を促したところで、どこまで信じられるものではない。彼が信じられるのは、蔦枝が彼に同意して一緒に死を選ぶときだけかもしれない。義治が手応へのない相手にかつとなると、蔦枝は彼の胸を押しかへした。

「うるさいわねえ、ちよつと黙つて！ 枕の下に河が流れてるんぢやない？ あゝあ、あたしたち、この河の外にあるのねえ、やつぱりこゝへ来たんだわねえ」

蔦枝は不知不識一度歩いた道を引返してきたことに、悚然とするものがあつた。彼女のこの詠嘆は、義治の胸にも応へた。彼はふーんと云つて、

「そんなに此処が好いなら、河の中へ突き落してやら」と唸つた。

葛枝は一と月まへまで鳩の町にゐた娼婦だが、それ以前にはこの洲崎の特飲街にもほんの短い間ゐたことがあつた。彼女の生れは利根の水郷のせゐか、水が好きである。二人で行き場なくさまよつた間の一夜の泊りにしろ、隅田川の水面をみると彼女は懐かしんだ。いつだつたか、彼女は義治に話したことがある。

「あたしの育つたのは、利根川の中にある夢の島つてところです。小さな島が水の中にあるきりの、名前負けのした島で、一軒の雜貨屋と床屋があるだけの貧しい村なんです。今でこそ土浦まで一日に一回、橋を渡つた陸続きにバスが出るけど、昔は舟の便しかなかつたんですよ。漁をしたり、狭い、僅かな畑をしたり、夏だけは遊覧の観光客が少しは来て、川べりに葭簀の店も出ますけど、水呑み百姓の村で、あたし達はもめんの継ぎはぎの着物よりほか着たこともなかつた」

あるとき婦人雑誌の花嫁衣裳を見て、一生に一度はせめて絹の着物を着たいと思つた、とも彼女は語つた。貧乏人の子でくさんで、彼女は七人兄妹の二番目だつた。今でもそこに弟妹がゐるが、父は中風になつて寝たきりだし、弟はカリエスで治療をしなければならなくなつて、彼女は